

The Presence of Human Being (Part 6)

—Philosophical Meditation—

Seishi ISHII

Abstract: The thought of Blaise Pascal as a postmodern thinker in the early modern age was examined.

Pascal confronted the rational metaphysician Descartes and made much of the element of experience in the scientific method. Experience always plays a main part intuiting the principles in his mathematical and physical cognition as well as in his theological thoughts. The place where experience unfolds itself is nowhere else but in the heart. According to Pascal the heart is not irrational, but rather supra-rational, having its own reason and dimension (“ordre”). The infinities of space and of a vacuum intuited by the heart indicate the infinite itself, i. e. God.

According to Pascal’s ontology there are 3 existential dimensions to the human being. First is the dimension of body (“corps”) or flesh (politics, economy and military). Second is the dimension of spirit (science) and third is the dimension of love (“charité”) or religion. These dimensions differ from each other ontologically as do the dimensions of space.

Man is therefore multidimensional. And love springs invisibly from the impenetrable center of the heart as man perceives his being as a thinking reed which symbolizes the human body—an incomprehensible unity of createdness and creativity, extension and intension, and mortality and immortality.

Key words: Postmodernity, Multidimensionality, Body

現代世界の問題を根本的に考えうるためには、デカルトからフッサールまでの自我の超越論的哲学の立場ではなく、それとは違った、パスカルが「心」といった「身体・自己」の立場、徹底的な必然性の自覚が真の自由に転ずるような、そしてそこで一々のものが一々全体であり、真実なものとして、キリスト教的に言えば、みな神の被造物、神にいのちの息を吹き込まれたものとして、底無く肯定され、徹底的に生かされる世界が開かれるような立場でなければならない。

「これらの無限な空間の永遠の沈黙」——現代の文明の巨大な騒音も、また多量の情報のストックも、あるいは原子科学や医学の輝かしい諸成果も、それをはねかえすことはできない。それどころか、現代の文明の表面的な明るさは、宇宙の沈黙が我々の中にいよいよ深く浸透してきたことを示すのみであらう。

この、宇宙の沈黙を破る我々の言葉はいったいどんな言葉であろうか。それを充溢させる歌はどんな歌であろうか。そして、それをつきぬけていく働きは、また、それを包む祈りは。

註

以下、パスカルの著作については、慣例にしたがって、ラフュマ版の全集によって引用する。『パンセ』では、L. はラフュマ版、Br. はブランシュヴァイック版の番号である。

- (1) Pascal, Blaise: *Préface sur le Traité du Vide*, L., p. 230.
- (2) *ibid.*
- (3) *ibid.*
- (4) *op. cit.*, L., p. 230-231.

石井誠士：人間の現在

- (5) *op. cit.*, L., p. 231.
- (6) *ibid.*
- (7) Descartes: *Discours de la Méthode*, sixième partie.
- (8) L. 167-Br. 269.
- (9) Cf. Périer, Gilberte: *La Vie de M. Pascal*. L., p. 20.
- (10) L. 199-Br. 72.
- (11) L. 188-Br. 267.
- (12) L. 131-Br. 434.
- (13) L. 298-Br. 283.
- (14) L. 424-Br. 278.
- (15) L. 110-Br. 282.
- (16) L. p. 90-94.
- (17) Augustinus: *De Civitate Dei*. XIX 13.
- (18) L. 684-Br. 21.
- (19) L. 58-Br. 332.
- (20) L. 103-Br. 298.
- (21) L. 308-Br. 793.
- (22) L. 201-Br. 206.
- (23) L. 199-Br. 72.
- (24) L. 694-Br. 61.
- (25) L. 68-Br. 205.
- (26) L. 200-Br. 347.
- (27) L. 809-Br. 230.
- (28) L. 427-Br. 194.
- (29) L. 407-Br. 465.

は、ひたすら有限な「身体・自己」、このいと小さきもの、時間論的には「瞬間」の自覚を介して無限なものへ、ということである。

ともあれ、パスカルにおいて、近代的な自然科学の世界像と人間との乖離は、極点を経験している。彼の信仰は、そういう乖離、分裂の自覚を徹底したところに、向こうから与えられ、開かれてくるものである。パスカルは近代の立場自身の土台の空虚さを、すなわち、近代の根元のニヒリズムを見ている。デカルトの場合は、この点では、樂觀的である。自然科学的認識の進歩は、直ちに人間の精神の高揚を意味し、幸福の実現を約束するものであった。現代の科学、技術、社会、そして哲学が、基本的にこのデカルトの世界像に従って出てきていることは言うまでもない。そこでの重要なことは、科学が技術的になり、同時に、技術が科学的になりながら、政治や経済や軍事と結びついた産業という形で、自然と社会とその中の人間の在り方とを根本的に変革したということである。そして、そこでは、マクロ的にも、ミクロ的にも、世界が喪失した。つまり、「物」や生き物が、また「人」や社会が喪失した。かつて言ったように(第二章第二節参照)、「物量」の充溢によって「物」が、また、「ヒト」の発展によって「人」が消えた現代世界においては、同時に「物」も「人」もそこからして初めて「物」として、あるいは「人」として存在しようというべき「無限」とか「永遠」とかの超越の開けも失われるのである。この世界はただこの世界として、目に見えるかぎりの現象の世界として見られる。「心」が、また「心の在処」が、解らなくなる。現代の人間は皆、自分が、どこから来たのか知らないと同様に、また、どこへ行くのかも

知らないで、今日はあちらに、明日はこちらに、という具合にさまよい歩くばかりである。我々がかくも熱心に推進している文明全体が、自然と人間とをどのようにしていくのか、誰も知らない。人々は、そういうことを考え直す暇がない。要するにぎり押しに進めていかなければならないからである。このような在り方が現代のニヒリズムということである。

この、果てしなく膨張すると共に内にいよいよ空洞を拡げる近代的人間の問題性に対するパスカルの処方方は明らかである。つまり、それは、「考える葦」、この、人間の一番直接的な立場、生・死を「知る」「身体・自己」の立場、「心」の立場に帰ることである。そこに帰って、そこから「立ち上がる」、「よく考える」ことである。それは、「今・ここ」において、「今・ここ」を越えるということ、そういう仕方では、「今・ここ」の偶然性が必然性へ、神の摂理の時へと転ずることである。言い換えると、自己の被造性の根元において神の創造性に接すること、徹底的に生かされて生きる、死んで生きることである。それは、伝教大師の「一隅を照らす」にも、あるいは、禅語の「脚下照顧」にも当たるであろうか。「一隅」とか「脚下」とかといわれることは、「今・ここ」ということである。「この私」のまるごと、「身体・自己」ということである。そのときには——このことは、パスカルでは、まだあまり積極的に出てきていないように思われるのであるが——、他者が、つまり、「物」や生き物や他人が、そして世界、環境や社会が、重要な意味をもってこなければならぬ。「今・ここ」、この私の身体が、世界を開き照らすということにならなければならない。

属さない、宇宙はその「死」における彼の存在に触れない。ここに、人間の自由が、精神とは「秩序」を異にする「心」の自由がある。人間の存在はなきが如きものであって、しかもあるものである。権力や富や地位のような、この世の偉大のあらゆる栄光は、精神の探求にたずさわる人々にとって光を失う。学問や道徳はそういうこととは「秩序」を異にする。しかし、その精神の誇り高さも、「心」のリアリティーにおいては、無に等しくなるのである。

だが、ここで、まず重要なことは、古い「宇宙」、全体性の喪失である。あらゆるものが、なにかなく人間がその中に位置と連関とを見いだすべき全体の秩序は、この世界に存在しない。ここにパスカルの思想の近代的、否むしろポストモダンの性格がある。

それゆえ、宇宙の中で人間が占めている位置は、さしあたって、単なる偶然である。先に引用した断章の表現で言えば、私が「あそこでなくてここ、あの時でなくて現在の時に、なぜいなくてはならないのか」という理由は全くない」のであり、我々は、パスカルと同様に、この事実を前にして慄然とせざるをえないのである。存在の「今・ここ」は、世界が「宇宙」として理解されていて、その「宇宙」の全体の中に位置づけられて初めて根拠づけられるのであるが、そうした「宇宙」が失われているかぎり、人間に自己理解と落ち着いた確固たる生活とを可能にする全体的連関はなくなり、存在はただの偶然になる。生存は、ちょうど大海原に浮かぶ流木のように、定めなく、あてどなく、大波小波の間にただ漂うばかりである。

だが、パスカルは、人間のこのような状況にこそ、彼の根本的悲惨

と共に、その至福への契機を見ていた。「今・ここ」の存在に物理的理由はない。しかし、その理由のない「今・ここ」の存在は、信仰において超自然的に理由づけられるのである。無限と無との二つの無限は、「神のうちで、ただ神のうちでのみ再会する」。

言い換えれば、この世界とその中の事物とは、ある一つの目的や理念を実現するためにあるのではない。この世界の事物や出来事を見て、そこに存在の意味を、そしてその背後に神の存在を、客観的に認識することはできない。要するに、存在は不可解である。超理性的である。それは、存在の事実を認める信仰に属することである。「神がある」ということは不可解であり、神がないということも不可解である⁽²⁷⁾。

それゆえ、パスカルの神は世界の事物の存在の意味や目的をなす神ではない。それは、むしろ、肉や理性の目には「隠れている神」*Deus absconditus*⁽²⁸⁾であり、空間的に無である「心」に直接する神、そこにおいて、あらわになる神である。現実の世界に神の刻印はない。人間は、ただ神なき現実の世界の底に死んで、「隠れている神」、実在そのものに生きるのである。ここに人生の第一の関心と義務とがあり、それ以外はすべてどうでもよいことである。「幸福は、我々の外にも、我々の内にもない。それは神のうち、すなわち、我々の外と内とにある」⁽²⁹⁾。

『考える葦』の断章の終りのところで、「我々の尊厳のすべては、考えることの中にある。我々はそこから立ち上らなければならぬ」と言われ、「よく考える」*bien penser* ということが道徳の根源とされたのは、実は、そういうことである。「よく考える」ということ

それは、「心」として、他者との関係において限りなく自己超越していく存在者を意味しており、認識の対象としては、むしろ認識されざるものである。

彼は語っている。

「私の一生の短い期間が、その前と後との永遠の中に『一日で過ぎて行く客の思い出』のように呑み込まれ、私の占めている所ばかりか、私の見るかぎりの所でも小さなこの空間が、私の知らない、そして私を知らない無限に広い空間の中に沈められているのを考え巡らすと、私があそこでなくてここにいることに恐れと驚きを感じる。なぜなら、あそこでなくてここ、あの時でなくて現在の時に、なぜいなくてはならないのかという理由は全くないからである。だが私がこの点に置いたのだろう。誰の命令と誰の処置とによって、この所とこの時とが私にあてがわれたのだろう」⁽²⁵⁾

ここで、「私の知らない、そして私を知らない無限に広い空間の中に沈められている」という表現にパスカルの宇宙的孤独が言い表されている。人間のあらゆること、真面目なことや不真面目なことが演ぜられる空間は、人間をその一切の常為と共にけしつぷのように呑み込むが、人間について全く無関心である。どんな真面目なことも、どんな犯罪も、宇宙にとっては同じである。けれども、一層根本的なことは、ないのではなくてあり、あるといっても無に等しいこの存在が、いわば宇宙のヒートゥス、裂け目をなしている、ということである。それは、デカルトの、思惟と延長との間の存在の区別とは質的に違っ

ている。なぜかといえば、思惟と延長であれば、延長は、思惟の認識の対象となるからである。パスカルの場合には、もはや思惟と宇宙との間にそういう認識の対応関係はない。

この、宇宙の裂けめとしての人間は、一茎の葦に譬えられた。

「人間は一茎の葦に過ぎない。自然の中で最も弱いものである。だが、それは考える葦である。彼を押し潰すために、宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一滴の水でも彼を殺すのに十分である。だが、たとい宇宙が彼を押し潰しても、人間は彼を殺すものより尊いだろう。なぜなら、彼は自分が死ぬことと、宇宙の自分に対する優越とを知っているからである。宇宙は何も知らない。

だから、我々の尊厳のすべては、考えることの中にある。我々はそこから立ち上がらなければならないのであって、我々が充たすことのできない空間や時間からではない。だから、よく考えることを努めよう。ここに道徳の原理がある」⁽²⁶⁾

宇宙からすれば、人間は、あっても、実は、初めからなきが如きものである。全くなんでもない偶然に生まれた存在であって、だから、全くなんでもない偶然なできごとによって倒れてしまう。

しかし、宇宙の気まぐれに翻弄され、あるいはそれによって彼が死ぬとしても、人間は決して宇宙の一部をなすのではない。彼が生きて死ぬことを「知る」ことにおいて、そして、宇宙が彼に優越しており、彼の生と死の一切を支配していること、宇宙に対して彼がただ受け身に服従せざるをえぬことを「知る」ことにおいて、彼の存在は宇宙に

デカルト的なメテシス・ユニヴェルサルリスの現実化と見ることもできるであろう。これこそまさしく近代の「メタ物語」にほかならない。そこでは、「秩序」の区別がなされなくなり、人間が一次的画一的に見られるようになる。

パスカルが「経験」の多次的構造を考えたのは、現実の有限な存在としての「身体・自己」、身体と自己とは違っていかにも不可分に一体であり、身体が自己であり、自己が身体であるという意味での「身体・自己」が問題だからである。言い換えると、自己の永遠の生命が問題だからである。自己の存在に対する責任——それはまた、世界の中の他者、他の「物」、生き物、他人との関係に対する責任を離れてはないのであるが——、それを突き詰めていくとき、そこに超越の問題が出てくる。

近代のすでにその初めにおいて、取り残されたのはこの問題である——なぜなら、近代は、それを後回しにする形で出発しているのだから——。時、そしてそれと一つの永遠の生命の問題、「心」、自己の存在から絶えず逃走する形で、文明は進んできた。

よく、科学技術は、目前の問題を解決することには非常に熱心になり、効果を示すが、その先を考えること、長期的な見通しをすることは不得意であり、変革の結果に責任を負うことができない、と言われる。これは、現代の人間の在り方そのものと結びついている。責任の問題は、政治や経済や軍事の次元においても、また学問や道徳の次元においても存在する。例えば、学者が研究を進めて成果を発表することにより、学問の世界、いわゆる学界に、貢献することは、学問的責

任に属することである。それを怠ることは、学者としての責任を回避することであり、それは、学者であることの資格、学者の徳を失うことを意味する。あるいは、軍人が、敵国の侵略を未然に察知してよく防ぐことは、彼の榮譽であるよりも、むしろ彼の責任に関わることである。しかしながら、それらは、人間としての彼の存在そのものへの責任とは次元を異にすることである。近代のいちばん大きな問題は、この、人間の存在そのものへの責任が見られなくなったことである。責任の「秩序」への感覚、あるいは敬虔さ——これが、現代においても問われていることであり、パスカルのような思惟が今日我々にもっとも語りかけることである。

彼は言う。「私は秩序というものがどういふものであるか、そしてそれを理解している人がいかに少ないかということ、いささか心得ている。人間的な学問は一つとしてそれを守ることができない。聖トマスは守らなかった。数学は、それを守るが、その深みにおいて無益である」⁽²⁴⁾と。

第四節 「考える葦」としての人間

パスカルの思惟の出立点は、人間の具体的な自覚にあった。自分が自分を見る、この自覚から、世界や神を考えた。

その点でいえば、彼は、デカルトと同じであり、デカルトと同様に近代的であるが、デカルトにおいて、自覚が、明晰かつ判明に知られた、明晰かつ判明な思惟活動そのものであり、神や世界を対象的に認識する自己同一的主体を意味していたのに対し、パスカルの場合には、

人間は「物体の秩序」と「精神の秩序」、つまり、政治や経済や軍事の次元と、学問や道徳の次元とに属している。けれども、彼はただそこに生きているのではない。ただそこに留まることはできない。見方を変えて言えば、「物体の秩序」も「精神の秩序」も、実は、元々ただそれだけで成り立っているのではないのである。それゆえに、人は前者の欲情 *concupiscence* の追求において、深い退屈を、また後者の好奇心 *curiosité* の満足において虚しさを覚える。それらは、結局、人間の自己の存在の根拠から遊離したところのものだからである。

ガリレオやデカルトに代表される近代の科学的世界像においては、物体と精神とが分離し、精神、自我は物体、即ち自然の世界を数量的に把握し、その法則を量の関係として方程式化し、機械のように操作し、支配しようとするものであった。しかし、パスカルは、十七世紀にあつて、すでにそうした近代的人間の在り方に根本的な問題を見ていた。つまり彼は、そのように自我が自立し、自然を対象化して支配しようとする人間の在り方、いわゆる近代的なヒューマニズムの在り方において、人間の存在のその超越的根柢からの統一が失われることを洞見していたのである。

パスカルが宇宙の無限に対するとき、それは、人間の理性の無限性に対応するものとしてではなく、むしろ、人間の存在の卑小さに対応するものとして見られる。「これらの無限な空間の永遠の沈黙が私を恐れさせる」⁽²²⁾という彼の言葉は、自然科学者としての彼の「心」の孤独を表している。そこでは、科学的研究における好奇心の満足もまた一つの「氣ばらし」に過ぎないのである。そうした好奇心のもう一つ

手前の「心」の直接性のところでは、宇宙の無限と共に自己の存在が一つの問いになる。「無限の中において、人間とはいったい何なのであろう」⁽²³⁾と。

彼は『パンセ』の中の「人間の不均等」⁽²³⁾の断章で、一匹のダニを例にしながら、現実の人間の、無限と虚無との中間の存在を描き出す。そして、その後で、彼は次のように語る。

「そもそも自然の中における人間とは、いったい何なのだろう。無限に対しては虚無であり、虚無に対しては全体であり、無と全体との中間である。両極端を理解することから無限に遠く離れており、事物の窮極も彼に対して立ち入りがたい秘密の中に固く隠されており、彼は自分がそこから引き出されてきた虚無をも、彼がその中へ呑み込まれている無限をも等しく見ることができないのである」と。

これら二つの無限を見ず、したがって、人間の自己の存在の有限性を見ず、むしろそれを見ることから絶えず遠ざかるうとして、「物体の秩序」や「精神の秩序」の何かに、利益や快楽や名誉に、あるいは「解放」や「進歩」の追求に、取りすがるところに、近代の人間の在り方の本質がある、と言うことができる。特に、二十世紀のテクノサイエンス、科学的となった技術、また技術的となった科学による物量文明は、まさに、「物体の秩序」と「精神の秩序」とが深く結合し、相互浸透しながら、未曾有の歴史的運動となったものである。そこでは、精神も物体もともに量化され、更に情報の形で記号化されて把握されるのである。近代―現代の高度のテクノサイエンスは、あるいは、

『パンセ』の「三つの秩序」の断章⁽²⁾で彼は次のように語る。

「物体から精神への無限の距離は、精神から愛への無限にはるかに無限な距離を表徴する。なぜなら、愛は超自然であるから。」

この世の偉大のあらゆる高貴は、精神の探求にたずさわる人々にとって光を失う。

精神の人々の偉大は、王や富者や将軍やすべての肉において偉大な人々には見えない。

神からのものでなければ無に等しい智慧の偉大は肉的人人々にも精神の人々にも見えない。これらは類を異にする三つの秩序である」と。

「物体の秩序」は、また「肉の秩序」でもある。そこでは、政治や、経済や軍事などのように、「力」が意味をもつ。

「精神の秩序」は、これとは全く違う。それは学問の次元である。パスカルはアルキメデスを例に挙げて述べている。

しかし、「愛」charité、宗教は更に違う「秩序」である。

同じ断章の終り方では、

「しかし、世には肉的な偉大にのみ感心して、精神的な偉大などはないかのように思っている人があり、また精神的な偉大にのみ感心して、智慧のうちに更に無限に高いものはないかのように思っている人がある。」

あらゆる物体、即ち大空、星、大地、その王国などは、精神のもっとも小さいものにも及ばない。なぜなら、精神はそれらのすべてと自身とを認識するが、物体は何も認識しないからである。

あらゆる物体の総和も、あらゆる精神の総和も、またそれらのすべての業績も、愛のもっとも小さい動作にも及ばない。これは無限に高い秩序に属するものである。

あらゆる物体の総和からも、小さな思考を発生させることはできない。それは不可能であり、他の秩序に属するものである。あらゆる物体と精神とから、人は真の愛の一動作をも引き出すことはできない。それは不可能であり、他の超自然的な秩序に属するものである」と語られている。

線をいくら寄せ集めても面ができるのではなく、また、面をいくら重ねていっても立体が生まれるわけではない。線と面と立体、それらは、それぞれ「秩序」、次元が異なるのである。「物体の秩序」と「精神の秩序」と「愛の秩序」の、人間の存在の三つの「秩序」の間も、同じ関係になっている。物体の力をいかに集めても、そこから、精神的な働きが、学問や道徳が生まれるわけではない。同様に、精神的な働きをいかに増やし、例えば、世界中の大学の代表的な頭脳を集めても、そこから、一つの「愛」の働きが出てくるわけではない。「愛」は、本来学者にとっては、理解できないもの、「愚か」である。

しかしながら、自己自身にとって問になる「心」の存在者として、人間は、「物体の秩序」と「精神の秩序」とにありながら、更に、それらを全体的に越えていくべき存在者である。人間はもともと「無限のためにのみ産み出された」存在者であり、自己自身を限りなく越えていくのである。パスカルの『パンセ』として残された弁神論は、人間のこの自己超越の必然性と論理とを明らかにするものであった。

の序列の量は無に等しいものとして無視されるべきである。

私が、不可分量の研究に携わる人にはよく知られているこれらの備考を敢て加えたのは、統一を求める自然が見かけ上もっとも遠く隔たっているものの間にしつらえ置いている『常に驚嘆すべき結びつき』*la liaison, toujours admirable* を際立たせんがためである。それは、今の例では、我々が、連統量の次元の計算が、累数の和と関連しているのを見たところに現われているのである⁽¹⁶⁾』と。

パスカルは、諸「秩序」の質的差異をはっきりと見ようとする。しかし、諸「秩序」の質的差異をはっきりと見るのは、それらの「統一」、「統一を求める自然が見かけ上もっとも遠く隔たっているものにしつらえ置いている常に驚嘆すべき結びつき」を明らかにするためである。「心」における「経験」が明示していくのは、世界の中の存在の多様性、多元性である。しかも、そこには、さしあたって見えなくされているにせよ、「結びつき」が常に新たに発見されるのである。

「秩序」の思想は人類の歴史と等しく古い。ギリシア語のコスモスも元々「秩序」を意味していた。アウグスティヌスの「秩序」の定義は、古典的である。「秩序とは、『等しきものと等しからざるものとの、それらの各々に至当な場所を与える配置』*parium dispariumque rerum sua cuique loca tribuens dispositio* である⁽¹⁷⁾」。

パスカルが「秩序」の問題を考えていたとき、当然そこにはそれらの互いに異なる次元の各々にそれにふさわしい場所を得せしめる全体

の「秩序」、「諸秩序の秩序」*l'ordre des ordres* もまた念頭にあったはずである。全体の「秩序」の中に正當に秩序づけられるのであれば、個々の「秩序」は「秩序」でありえなくなるであろう。彼は、一つの断章で、次のように語っている。

「秩序。自然はすべての真理を各々それ自身のうちに置いた。人為はそれらのうちの一つを他の中へ閉じ込める。しかし、それは自然ではない。各々の真理は自分の場所を占めている *Chaque (vérité) tient sa place.*⁽¹⁸⁾」と。

パスカルは、「秩序」を貴ばざる在り方、つまり「暴恣」*tyrannie* について、「暴恣はおのが秩序の外に普く支配せんとする欲求に存する⁽¹⁹⁾」と言う。人は諸「秩序」の超越論的区別を明確にして、各々の「秩序」をそれにふさわしい場所にあらしめなければならない。しかし、現実の人間は、常に「暴恣」に陥る。「人は正しきものを強くあらしめることができないがゆえに、強きものを正しいとした⁽²⁰⁾」のである。だが、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に」返す姿勢においてのみ「心の秩序」が開示される。人間の存在の高貴さはそこにある。

第三節 三つの「秩序」

かくして、パスカルの洞察によると、人間は、三つの「秩序」に生きていることになる。そして、それらの「秩序」の間には質的差異があるのである。

の見るまなざしである。自然の事実は、けっして神、実在そのものを示さない。この世界におよそ神の痕跡はない、とも言える。しかも、自然の事実は実在を「表徴」figurerするのである。自然と超自然とは、「表徴」と「実在」の関係として、切れてつながっている。それが、彼の「秩序」の見方である。

それゆえ、パスカルでは、「秩序」は、デカルトのように、推論する理性で体系的統一的に見られる一つの様な世界の法則性ではない。つまり、*mathesis universalis* の法則性ではない。デカルトでは、物体と精神とは違った実体を、したがって、それぞれまったく独立の存在の次元をなすといっても、法則性としては、むしろ一元的一次元的に考えられるべきものであった。パスカルでは、それらははっきりと「秩序」を異にするものである。しかも、「秩序」は物体と精神のみに限られない。全体としての人間存在は精神を越えている。「人間は人間を無限に越える」*L'homme passe infiniment l'homme*、そこに、彼のいわゆる「心の秩序」の開かれる理由が存するのである。「心にはそれ自身の秩序がある。精神には原理と証明とによるそれ自身の秩序があり、心にはそれとは違う秩序がある」と彼は言う。デカルトとパスカルとは対極をなす思想家であるが、それは、具体的には、体系の思惟と「秩序」の思惟、あるいは、人間を精神において見るか「心」において見るかの違いとして現われている。

パスカルの世界は、我々のもっとも具体的な存在である身体としての「心」に開かれる世界である。そして、宗教は、「心」に啓示される。「神を感じるのとは心であって理性ではない。そこにこそ信仰はあ

る。『理性にではなく、心に感じられる神』*Dieu sensible au coeur, non à la raison.*⁽¹⁴⁾と彼は言う。のみならず、我々の日常性や科学の世界も、実は、「心」において成立している。例えば、他人の痛みを感じるのとは、やはり「心」である。総じて、推論し判断する能力としての理性は、分析の働きはよくないとしても、分析する前にあり、分析した結果を総合する際にも不可欠な全体的統一的なものを得ることはできない。これが実は、「心」の直観的作用によるのである。

彼において、「心」は理性に対立し、これを排除しようとするものではない。むしろ理性を越えてこれを包みつつ、理性の作用の基礎をなすものである。日常性から数学や物理の自然科学の分野を経て宗教に至るまで、それぞれの次元において、人間存在にとって分析が課題である場合には理性が、これに対して、総合が課題である場合には「心」が、その都度働き、両者は相補う関係にある。「諸原理は直観され、諸命題は結論される。方法は違うにせよ、すべては確実になれる」のである。⁽¹⁵⁾

彼の数学の論文の中に、数の「秩序」、即ち「数序列」*ordres numériques* をテーマにしたいくつかの論文が見出されるが、その中で、『累数の和』*Somation des puissances numériques* と題する論文の最後のところで、彼は次のように語っている。

「任意の数において、これに下位の無限の秩序の大きさを加えても、連続量は増加しない。かくして点は線に、線は面に、面は立体に何も加えない。あるいは——数論にふさわしく数について言うならば——、根は平方に、平方は立方に、立方は平方—平方に加えられない。下位

第二節 「心の秩序」

ともあれ、物理学はパスカルの全「経験」の中で、極めて重要ではあるにせよ、それでも、全体としてなお一つの特殊な「経験」の意義しかもっていないかった。彼の「経験」、彼の世界はもっと広く深いのである。

彼は、彼二十三歳の一六五四年、真空の実験に着手するとほとんど同じころ、ポール・ロワイヤル、すなわちジャンセニズムの教会に信じた。いわゆる彼の第一回心である。以後、数学や物理学の研究と並行して、彼のうちで宗教の問題がそれとして深められていくことになる。自然科学者パスカルが宗教にごく単純かつ容易に入っていたということ、普通からすれば非常に理解し難いことである。しかし、「経験」の多次元性に立つパスカルの世界からすれば、それはむしろ当然なことと言える。姉ジルベルトの伝えているように、幼時より彼の父から、「すべて信仰の対象になる事柄は理性の対象になることができない」という、信仰と理性との完全分離の精神がしっかりと植えつけられており、ポール・ロワイヤルの教会がまたかかる精神に基づくものであったのであるから、彼の入信はごく自然な成り行きであったにちがいない。パスカルにおいて、「経験」は初めから多次元的であり、それぞれの次元は熟し完結しながら、ほかの異質な経験に開かれている。言い換えれば、自然の経験は、自然の経験であって、しかも、超自然的経験に開かれるのである。個々の「経験」は、それぞれ独立していて、それらの間には飛躍がある。非連続である。しかもそ

れらは一つの「経験」としてつながっている。連続している。「経験」は非連続の連続である。

パスカルがこの第一回心と前後して、真空の問題にあれば強い興味を抱いたこと自体にも、実は宗教的理由が隠れてあったであろう。この問題は、天体運行の法則や分子の組成などとは違って、自然全体における無限に関わる問題である。つまり、真空とは、物質を無限に分割していくときの極限であり、『パンセ』の中の「人間の不均衡」の断章で、彼が人間の存在を無限と虚無との「中間」milieu と特徴づけたときの「虚無」néant、あるいは、そこで、「学問のこの二つの無限のうち」、「小さい方の無限の方は見られ難い」と語っている場合の「小さい方の無限」にはかならないからである。この二つの無限は「互いに遠く隔たり合うことによって互いに触れ合い、結び合い、神のうちで、ただ神のうちでのみ再会する」のである。数字における数や空間の無限と類比的に、真空こそは、まさに自然界において「経験」を介して認識される無限なる神のもっとも明瞭な「表徴」figure と言えるであろう。ひとたび自然界のうちにかかる神の刻印あるいは写しを見たものは、次には、それが表す神自身、実在そのものへと突き進んでいかなければならない。次の言葉はそれをもっともよく示すものであろう。「理性の最後の歩みは、理性を越えるものが無限にあることを認識することにある。理性はそれを知るところまで行かないならば、弱いものでしかない。自然的な事物が理性を越えているとすれば、超自然的な事物については何と言えよ⁽¹⁾のか」と。

パスカルにおいて重要なのは、この、現実において現実を越えても

我々の感性に自ら現われ、少しでも反省すれば無視することのできぬような経験をを用いるほうが、もっと珍しい、学問研究の手を加えられた経験を求めるよりもよいからである」⁽⁷⁾と。

しかし、彼が「経験」と言っているものがパスカルのそれと違うことは、少し後の言葉で明らかになる。

「而して、この点において私が取った順序は次のようなものであった。第一に、私はこの世界にあるもの、あるいはありうるものすべての諸原理即ち第一原因を一般的に見いだそうと努めた。そのために私は世界を創造した神のみを考慮し、また諸原理を我々の魂のうちに先天的にある、一種の真理の種子からのみ取り出したのである」⁽⁷⁾と。

デカルトには、理性のあらゆる判断に立ってある事実としての事実を認める態度がない。事実は、明晰判明に捉えられるためにあるに過ぎない。彼が「世界を創造した神」と言っているのも、魂のうちにある先天的な概念としての神であるに過ぎず、創造の事実における神ではない。これに対して、パスカルの場合、事実を事実として認めることこそ理性を正しく導く大前提をなす。神も事実として「経験」される生きた神である。

ガリレオの弟子のトリチェルリの実験で水銀柱内に生じた異常な空所は理性をつまずかせる。そこで、理性は、この理性の他者、「異質なものの」の出現、この新しきものを前にして、自らを無にして、事実を謙虚に受け取る努力をしなければならない。むしろ、理性は種々の

事実を比較考慮して、それらを統合的統一的に説明することを可能にする一つの視点を模索し続ける。事実を成り立たせている理由を帰納的に推論して法則を発見しようとする。その際、事実の収集も、可能なかぎり、数量的関係に置き換えてなされるであらう。だが、その法則、即ち理論はなおあくまでも仮説であるからして、より周到綿密な「経験」、「実験」により吟味検証されることを必要とする。水銀柱内の空所は、いかなる物質によっても充たされていない空虚な空間を想定せぬかぎり説明できないが、それではまだ「自然は真空を恐怖する」のアリストテレススコラの理論を論駁するに十分ではない。構想された理論は、更に「実験」によって修正されたり、より精緻化されたり、あるいは、場合によっては、別の事実が現われて、全く否定され、別な新たな理論を探さねばならぬようになるかも知れない。事実も理論も等しく「経験」の両面である。後にパスカルは宗教を論ずる際、「理性の服従と使用、そこに真のキリスト教がある」⁽⁸⁾と語るが、これはそのまま物理学にも当てはまる。

事実の観察も、第一原理の獲得も、その検証も、真理の認識は、徹頭徹尾「経験」による。それは感性の作用であるよりも、むしろ、自己の作用、「心」の作用である。人間の精神がもともとそのように感性的であると同時に理性的なのである。「経験」とは、存在するものが、その存在性を、つまり、存在の真理、理法を顕現する場所、「開け」である。「経験は物理学の唯一の原理である」という言葉はそれを示している、と言えよう。

ており、人間の精神は自分自身の努力でそれに至るにはあまりに弱いがゆえに、全能にして超自然的な力によって運ばれぬかぎり、高い知識に到達することができない⁽¹⁾。「理性にとってもつとも不可解な素材に完全な確実性を与える」⁽²⁾のは権威であり、聖書である。これに対して、感性 *sens* もしくは推論がタッチする真理領域、すなわち科学においては、権威は無益であり、理性のみが働かねばならない。このように、「権威と理性とは各々区別された権利をもっている」⁽³⁾のである。

神と神の啓示としての権威すなわち宗教は永遠であり、不動である。それは、常に完全である。パスカルも、この信仰の中に生きている。けれども、「経験と推論に服する諸科学は完全になるために増し加えられなければならない」⁽⁴⁾のである。「無限のためにのみ産み出されている人間」*l'homme qui n'est produit que pour l'infinité*⁽⁵⁾の精神は、自然現象の探求の領域においては、限りなく経験を増し、間断なく進歩していくのである。だから、「経験は物理学の唯一の原理である」⁽⁶⁾。理性の推論は感性の「経験」に即し、「経験」の与える事実に関してなされるときにのみ有効である。「経験」は、「実在性」*réalité*に関わっている。自然現象は、さしあたって、どこまでも理性の他者であり、感性がいかに誤りやすいといっても、感性の「経験」を経ることなしには思维の対象となることはできない。

しかしながら、感性も、それだけでは、自然の事実は与えても、事実の法則を与えることはできない。法則の抽出は、どこまでも理性の仕事である。自然科学の方法は、理性と事実、推論と「経験」の相互作用に求められる。「経験」はつねにどこかで繋ぎ止められて、統

一にもたらされなければ、ただのバラバラのものに過ぎない。

パスカルがデカルトに根本的に対立する思想家であることは思想史上の常識であるけれども、この対立の真の意味、そしてその今日的意義ということになると、それは、なお根本的解釈を要することである。デカルトもパスカルも、近代的主体性、デカルトがはっきりと表現にもたらしたコギト、「我考える」の立場に立脚することから出発する。しかし、その「我考える」の立場が「我考える」の立場だけで充足するものとして見られているかいなかの一点から、すでに両者ははっきりと対立する。パスカルの場合、「我考える」は「経験」の多次元的深化の動性としてある。ひとつひとつの経験がそれとしてそこで充足し完結しながら、同時に、他の経験の可能性に向かって開かれるのである。これに対して、デカルトは、すべてを推論の明澄性において捉えようとする。彼は、「我考える」の主体性と機械的自然観との確立によって、一旦バラバラに分裂した「神—人間—世界」の関係を、むしろもはや古い目的論的關係としてではないにせよ、あくまでも理性的に統一して考えようとするのである。デカルトは本質的に形而上学的であり、なおスコラの伝統の上に立っている。パスカルには、もはや世界のそのような仕方の統一の企投の可能性はない。神と人間、神と世界、そして人間と世界の間の深淵は底なしに深い。

よく知られているように、デカルトもまた、「経験」を重視した。『方法叙説』の中で、彼は次のように述べている。

「更に経験に関しては、我々の知識が進歩すればするほど、それがますます必要となることを私は認めた。なぜならば、初めのうちは、

人間の現在

——哲学的省察——

(承前、六)

石井誠士

第四章 ある別な出发点——パスカル再考

序

我々は、現代における人間の根本的問題——現象面においても、また、本質面においても——の分析検討により、問題解決の手掛かりをどのような方向に求めていけばよいかを考えてきた。すでに最初の、現代の人間の問題状況の検討のところでも明らかにしていたのであるが、問題解決の方向は、どうしても、やはり、人間の存在それ自身のところ、我々の自覚的存在それ自身のところにある、と言わねばならない。現代世界の危機ということは、個人や自然や社会に先立って、まず、自覚存在としての人間自身の危機であるのである。現代においては、人間が人間自身にとって自明でなくなった、不可解なものになった、と言わねばならない。

このことは、「全体的なものの終焉」における「ラディカルな多元性」の状況の現出として捉えられた、ポストモダンと呼ばれる現代ヨーロッパの思想において、一層尖鋭化して現われている。我々は、「ラ

石井誠士：人間の現在

ディカルな多元性」といった立場を底から可能にするような立場——それが「自覚」という立場になってくるわけであるが——を探索しなければならぬ。ここでは、この問題と、すでにヨーロッパの近代の初め、十七世紀において、根本的に対決していた孤高な思想家ブルーズ・パスカルのところに帰って考えてみよう。それは、おそらく我々に、現代の状況において、人間の存在を根本的に考える貴重な手掛かりを与えてくれるであろう。

第一節 パスカルの「経験」

パスカルの思考の大きな特徴は、現実を見る見方が、けっして固定した何らかの概念や対象やそれらが開く一定の地平に留まるのではなく、絶えずそれをうち壊して、限りなくそれ自身に、つまり、自己の底の無限なるものそのものへと深まっていく性格のものであるところにある。それは、「経験」の性格をもつ。しかも、「経験」は、それ自身の中に限りなく深まりゆく「経験」、自己内深化する仕方で自己発展していく「経験」である。「経験」は多次元的である。

パスカルのこの「経験」の多次元性の考えが最初に明確に述べられたのは、一六四六年以来の一連の真空に関する実験と思索の後、一六五一年春、二十七才の時に執筆された『真空論序文』*Préface sur le Traité du Vide* においてである、と考えられる。そこで、彼は権威(宗教)と理性(科学)の相違を明らかにし、後者を前者の暴恣的桎梏から解放せんとしている。つまり、この二つは、次元、彼のいわゆる「秩序」が異なるのである。「神学の原理は、自然と理性とを越え